特別寄稿

入江泰吉による風景写真の今

小松原　尚（奈良県立大学地域創造学部教授）

はじめに

2012年9月29日に奈良地理学会を主催する野外巡検が実施された。「入江泰吉の主題による古都奈良の昔と今、半世紀の時空を越えたツアー」をテーマとした。この近辺に暮らす方々にとっては、日常の断片に過ぎない。奈良にて教育を職にされている方々には、何度も児童、生徒、学生を引率されてこの界隈を歩かれたことであろう。県外からの参加者にあってもこの地域・コースは、リピーターであれば、何がしか記憶にとどまっていると考えられる。その意味では、ありふれた巡検である。

このような定番コースをあえて選んだのは、今回の巡検のタイトルにあるように、一人の写真家の足跡を辿ってみたいと考えたからに他ならない。彼の眼に、ファインダーを通して垣間見えた日常を、今のそれと同じ視角から重合せてみたいと考えたのである。ツアーとは異なる場所への移動もあるが、同じ場所でも時間が異なればそれは、時空間の移動を楽しむツアーとなると考えたのである。今回の巡検は、それら両方を試みるという贅沢なものであった。こうした試みが当を得たものかどうかは、参加者のご判断に委ねるしか

ないが、入江泰吉をキーワードに一人の一人の時間と空間がこのツアーを通じて共有化できればひとまずは良しと考えた。

今回の巡検には標記学会の会員のみならず、お茶の水女子大学、奈良女子大学の卒業生の方々も年齢を超え、多くの方々が参加になられた。世話役の1人である内田忠賢先生の企画・調整の労に感謝申し上げたい。そして、参加者のお１人からは、「奈良地理学会のエクスカーションに参加させていただき、まことにありがとうございました。大変に興味深く、楽しく過ごさせて頂きました。東大寺と興福寺、春日大社くらいが定番コースですがなかなか志賀直哉旧宅までは行けません。エクスカーション参加者の生まれた頃の奈良と現代を写真集を見ながら比較して歩くという企画は、奈良に住んでいる方にしかできないことだと思います」（抜粋）との丁寧なごあいさつを頂戴した。

この評価を踏まえると、今回の巡検は概ね成功裡に終えられたと考えられる。今回参加になられた皆さんから受けたインパクトをもとにその成果を小文にまとめておきたいとの思いから本稿をしたためた。入江泰吉の写真集におさめられた過去とわれわれが観察した現在の画像を比較し、そこに写し出された景観の変化を確かめつつ、その構造的背景に思いをはせる。尚、本稿は小松原（2012）に加筆補正を施したものであることも了解いただきたい。

1. 入江泰吉の風景写真

入江泰吉記念奈良市写真美術館（2011）は、入江泰吉（1905－1992）の写真集であり、編者は「入江泰吉記念奈良市写真美術館」である（［ｉ］参照）。その名の示すように、入江の作品群を主たる収蔵品としている。この美術館は、入江が亡くなる前年に彼が、全作品（約8万点以上のフィルム）と著作権を奈良市に寄贈し、それを機に建てられたものである。

この美術館では、この入江の作品群に市民の関心を喚起すべく様々な企画展を開催している。中でも、昨年から今年にかけては、開館20周年記念、入江没後20年を踏まえ、いくつかの展観がなされている。例えば、「入江泰吉・杉本健吉展～大和路に魅せられた二人～」（期間：2011年10月1日～12月25日）、「入江泰吉の東大寺」（期間：2012年1月2日～4月15日）そして、「入江泰吉　奈良大和路春夏秋冬」（期間：2012年4月21日～7月8日）である。これらは入江の全ての作品の中から、自らが選んだ100点である「奈良大和路春夏秋冬」や晩年の自信作100点を選んだ「万葉の花」から構成されている。

入江のこれらの作品は、カメラを絵筆のように駆使し、時には鮮やかな色彩に、またある時は水墨画の趣を出すという芸術写真である。こうした卓越した技能・才能に恵まれたればこそ、彼にしか描けないアングルや特別に許されたポイントからの映像表現が可能になったに他ならないと思う。ただ私はそうした彼の作品に感動すればするほど、１つの疑問が膨らんでいった。それは写真のもつ記録性ということを彼はどうとらえていたのだろうかということである。そう考える理由は、近代の100年余の写真技術の発達はその記録媒体としての側面も少なくない筈だと思うし、入江がこの点を等閑に付したとは考えにくいからである。

さて、件の写真集の構成は7 章から成っており、第一章 奈良町界隈、第二章 佐保・佐紀・平城宮跡界隈、第三章 西の京、第四章 斑鳩・當麻界隈、第五章 山の辺の道・聖林寺界隈、第六章 飛鳥の里、第七章 文化財の記録、の順にまとめられている。そして、編者の「はじめに」（入江泰吉記念奈良市写真美術館編,2011：3）にも記されているように、この写真集は「奈良大和路の情緒あふれる風景や、見る者を祈りに誘う仏像が織りなす景観や美をテーマにした作品を思い浮かべる人が多い」従来の入江写真のイメージとは大き

く異なっている。即ち「入江泰吉は戦後から昭和30年代にかけて、……そこに暮らす人々の姿や変りゆく街の表情をとらえた写真も数多く撮影し……過ぎ去った時代と人々の暮らしを切り取った貴重な記録写真」の性格をもっていることを明示しているのである。したがって、この度の美術館の編集になる写真集は、上述の疑問に関して明確に答えてくれたと考えている。

以上述べたように、入江の作品は、明確な意志に基づく記録であることがわかった。したがって、同じ撮影地点からの追体験が可能になる。そして、戦後の入江泰吉の作品の出発点が、奈良の風景であったとすれば、入江の撮影した半世紀前と現在との比較は意味のあることと思う。つまり、敗戦後、50年代、60年代と現在の画像を重合せることによって、時空を越えたツアーを体験できるのである。だから、当写真集は地理学の立場からみれば、「地理写真」集であり、フィールドツアーなど、教育への活用の可能性は大きい。新旧の写真を比較しつつ、変わらぬ理由、変化の背景を考えることは、その背景にある地域構造研究や産業の立地を分析する際にも役立つ。ありふれた日常の今の昔を振返るという、ありふれた巡検にとってはありがたい一冊である。

2. 風景写真への地理学的関心

地理学における写真への関心は高い。例えば、石井ら（2005：83）は、地理写真を「学術写真の一部であり、地理学の研究や教育において使用される写真」と定義している。さらに、地理写真の条件を提示し、その一つとして、「時間的あるいは空間的変化のプロセスが理解できるようにする」（石井ほか 2005：85）ことをあげている。その中で、時間的変化に関しては、「変化の大きいときには、定点撮影が難しい。市街図などを持参して、周辺をよく歩き回って観察することも必要」（石井ほか 2005：89）とし、地図と写真の併用について論及している。

さらに、三木（2007）は、石井實の「地理写真」研究を視野に、明治の写真帖の研究を通じて、地理学における写真を対象とした研究の必要性に関して論じている。その中で「地域を研究対象としてきた地理学では、……広義の地図学に属する内容は多岐にわたり、その蓄積も豊富である」（三木 2007：130-131）。一方、地理学研究においては地図と併用される地域の記述や統計に関する研究に関してはその成果は多いとは言えない点を指摘している。即ち「近年の地理学では、内外で写真に関する研究が表れてはいる。しかし、……それらの研究は、写真に込められたイメージや視線を解釈するイコノグラフィー（図像学）の影響が強く、記録性にはほとんど関心が払われていない」（三木 2007：131）。

景観を記録としての写真としては、19世紀後半から20世紀にかけて、活躍した女流旅行家であるイザベラ・バードのものがある。南極と南米を除けば、ほぼ世界の大陸を股にかけた行動範囲である。そして訪問地域の旅行記を数多く手掛けている。邦訳のものだけでも例えば、『日本奥地紀行』、『朝鮮紀行 - 英国夫人の見た李朝末期』、『ロッキー山脈踏破行』そして、『中国奥地紀行』である。秋山（2003：20）によれば、「英語圏では、日本に比べて旅行記・紀行文が読書界ではるかに大きな位置を占めており、にわか仕立てのきわめて恣意的な見聞録ではない、立派な地誌民族誌であったり、堂々とした文明批評になったりしているものも多い。バードの著作もその一である」とのことである。

また、この時代には、ハードとソフトの両面から、写真の技術は急速に発達した時期でもある。バードもこのイノベーションを享受し、自らの旅の記録を画像に留めている。彼女が編んだ私家版写真集（『Views in the Far East』[極東の風景]）には、1894年から97年にかけて日本を足場に朝鮮半島や中国、ロシアの沿海州を旅した時の写真60点を収録してある。その中で、日本で撮影されたのは東京や対馬、日光など11点であり、平凡社東洋文庫

『イザベラ・バート　極東の旅１』（金坂清則編訳）に収録され、100年前の日本をみることができる（「毎日新聞（夕刊）」2005年6月28日付【栗原俊夫】）。

金坂は「イザベラ・バード没後100年に当たって」（「北海道新聞（夕刊）2004年10月21日付」）と題するコラムの中で、バードが旅した世界の風景がどのようになっているのか、いわばバードの旅以降における風景の変化と持続とその意味について感じ、考えることはとてもおもしろく重要なことと指摘している。そして、金坂はバードの旅行記を携えて彼女の旅の世界を旅する中で、このような二つの旅の時空を同時に楽しむおもしろさを発見し、自らが撮影した写真を厳選し写真展を開催した。

この写真展へのコメントの中で、富田（2010：214－215）は、金坂の「時を隔ててバードと同じ地で写真を撮影する意義とはいったい何なのか？」という疑問文を抱いて鑑賞に行ったと記している。さらに、金坂のツアーに対する姿勢について「残されたバードの著書や講演記録、写真などの資料をつぶさに調べ上げ、さらに現地を訪れてフィールドワークを行い、実際の旅のルートや訪問地を解明していったという金坂の熱意も、相当なもの」と評している。そして、「バードの写真にしろ、彼女の研究を続けてきた金坂の写真にしろ、ここで展示されていたのは、つまりは撮影者の立場や思いがはっきりと示されたうえで提示された記録である。主体的に世界とかかわり誠実に事実を伝えようとする情報の発信者にとって、そして、それを受け取る側のわれわれにとっても、写真はまだ有効な手段となり得るのではないか」と締めくくっている。

この富田の指摘は、金坂の試みが、われわれ地理学を学ぶ者にとってもその研究の進化の上で、大切な意義をもっていることを示唆していると考えられるのではないだろうか。そこで、以下に、入江の写真に依拠しつつその現在の状況を提示し、比較してみよう。

3. 入江の視角から見た今

(1) 変わらぬ佇まい

新薬師寺は、寺伝によれば747（天平19）年に光明皇后が、聖武天皇の眼病が治るように行基に建立させ、七仏薬師如来を安置したといわれている。かつては七堂伽藍が整った由緒ある寺院であったが、現在は本堂〔国宝〕だけが残っている。東門・南門・鐘楼・地蔵堂はいずれも鎌倉時代の建造で重文に指定されている。また「萩の寺」とも呼ばれ、境内全体に高畑独特の静かなムードがただよっている。本尊木造薬師如来坐像〔国宝〕とそれを囲む等身大の塑造十二神将立像〔国宝〕が有名である（［ii］より引用）。

入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：81）に、「新薬師寺付近より高円山を望む」という標題の作品が掲載されている。その説明によれば、「現在の奈良市写真美術館のある場所より少し南に行ったところから高円山を望む。今、高円山には『大』の字が見えるため分かりやすい。昭和35年8月15日から毎年、この日に戦争犠牲者の慰霊と世界平和のため大文字送り火が行われている」とのことである。入江写真では水田は収穫後の様子であるが、写真1は2011年9月に撮影したものであるので、たわわな稲穂をみられる。

写真1　新薬師寺

さらに、上記の地域と奈良の旧市街を結ぶ道が写真2である。入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：80）には「高畑の道」として紹介されている。それによると「かつて高畑のこのあたり一帯は、春日大社の関係者が住む禰宜町だった。志賀直哉が昭和4年から13年までの約

10年間居を構えて『暗夜行路』を仕上げたところとして有名」と紹介されている。いずれも、この地域の変わらぬ景観を確認できる。

次に猿沢池である。興福寺の放生池。わずか360mの周囲には柳が植えられており、大変風情がある。小さな池ではあるが、水面に興福寺五重塔の影が映る様子は、奈良公園には欠かせない景観の一つに挙げられる。また、甲羅干しをする亀でも知られている。奈良時代、帝の寵愛が衰えたことに悲嘆した采女が身投げをしたとの言い伝えもあり、池畔には祭神を采女とする采女神社がある（［iii］より引用）。

入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：41）に「猿沢池」のタイトルで掲載された作品は1945年頃と記されている。写真3は2011年9月の状況である。60年余りの時間を経ても地域の人々の暮らしに不可欠な景観として位置づいていることがわかる。

入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：71）の「寧楽女学院前」という作品は「ならまち」の伝香寺の山門から境内を覗いた構図になっている。「『寧楽女学院』は『寧楽女塾』と呼ばれ、昭和18年頃開校、結婚するまでの花嫁修業として、裁縫や茶道、華道等を教える塾」であった。写真4は2011年10月の様子である。「寧楽女学院」は既になく、境内の跡地には幼稚園がある。女生徒から園児へと対象は変わったが、教え育むための環境は変わっていない。

写真2　禰宜道

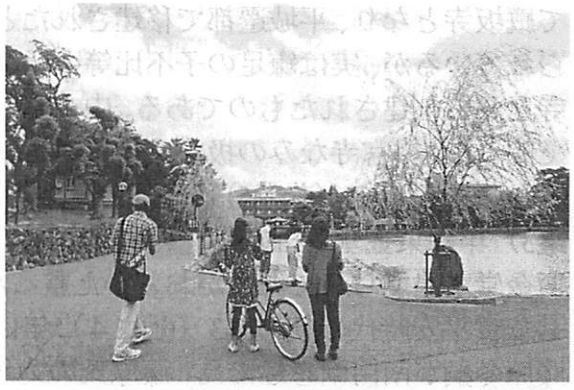

写真3　猿沢池

写真4　伝香寺門前

（2）追憶の空間

入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：218-219）に「疎開先から戻る東大寺法華堂四天王像」という作品が掲載されている。この作品は1945年11月に撮影されたものである。その解説によれば「終戦間近の昭和20年7月13日、法華堂の仏像疎開が始まった。まず四天王のうち二体は円成寺へ、残りの二体と金剛力士像、地蔵菩薩、不動明王は正暦寺へ疎開した。これらの仏像は終戦後の11月9日に円成寺から、続いて11月16日と17日に正暦寺から東大寺へ戻された。入江が撮影したのは、11月17日であった。奈良の仏像が米軍に賠償として持ち去られるという噂を聞き、奈良大和路の仏像を写真に残そうと決意した。いわば、入江の大和路撮影の原点」と述べられている。写真5は、2011年12月の様子である。

写真5　東大寺三月（法華）堂

次に、入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：69）を見ておこう。この作品は奈良市

内の「小川町にあった石造りの率川橋の親柱と地蔵堂が写っている。その後方には猿沢池から流れる率川が見える。町中を流れていた率川は、今は暗渠となり、その上に道路ができた。そして橋の親柱だけが建ち、その名残をとどめている」その様子が写真6（2011年10月撮影）であり、この地蔵尊を支える人々の信仰心が伺える。それから、写真7は興福寺の境内を撮影したものである。その興福寺は、藤原鎌足の死後の幸福のために建てられた山階寺が、飛鳥に移されて厩坂寺となり、平城遷都で移建されたと伝えられているが、実は鎌足の子不比等の発願で氏寺として創建されたものである。中金堂ができて間もなく、官寺なみの扱いを受けることになった。その後721（養老5）年に北円堂、726（神亀3）年に東金堂と五重塔、734（天平6）年に西金堂が建てられて伽藍がおおかた整った。そして、平安時代の初め813（弘仁４）年には、藤原冬嗣が南円堂を建てた。藤原氏の力が大きくなるにつれて興福寺も勢いを伸ばした。伽藍の外に一乗院・大乗院などの子院がつくられていった。興福寺は氏社である春日社一体だと主張して春日社の実権をにぎり、1135（保延元）年には若宮社をおこして翌年から若宮祭（おん祭）を始めた。興福寺は東大寺と多武峯を除く大和の寺社をその末寺や末社にするとともに、大和の土着の武士たちに僧の身分を与えて僧兵の主力にし、大和を治めるようになった。1180（治承4）年の平氏の焼討ちで、堂塔はことごとく焼けた。ただちに復興事業にかかり、14年ばかりの間に堂塔が再建され、1210（承元４）年には北円堂も落成した。1143（康治2）年に創建された三重塔も、鎌倉時代前期に再建されたものとみられる。1411（応永18）年、東金堂と五重塔が雷火のために焼失したが、東金堂は15（応永22）年に、五重塔は26（応永33）年に再建された。このころからしだいに寺勢が衰えたが、江戸時代には幕府の保護もあって少し持ち直した。1717（享保２）年、金堂から出火して、東金堂・五重塔・北円堂・三重塔を残して大半の堂舎が焼けた。西国三十三所札所だったので、南円堂だけはほぼ元どおりに再建された。明治維新の神仏分離で、興福寺は一時空家同然になった。1872（明治5）年、中心の堂塔を残して他の諸院の堂舎や土塀がとりこわされ、五重塔が売りに出されたりした。1881（明治14）年に再興の許可がおり、寺としての形もしだいに整っていった。1998（平成10）年から、壮大な伽藍の復原整理事業がすすめられている（［iv］より引用）。

写真6　小川町率川橋

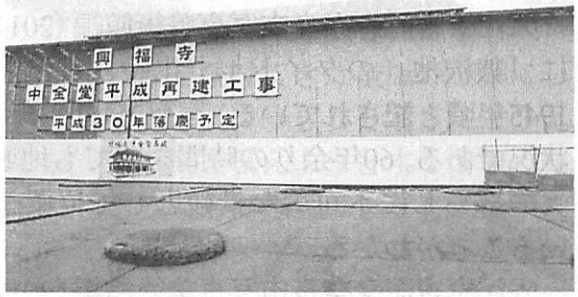

写真7　興福寺境内

現在の中金堂に代えて、新しい中金堂を建設中であり、写真7に示したように周囲を屋根と囲いにおおわれている。この場所の60年余り前は、入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：39）のようになっていた。「境内に桜の花が咲いていることから、花見客だろう。また昭和24年から34年まで、奈良市では『桜まつり』が催され」たことも紹介されている。新しい中金堂完成後には、この空間は追憶の世界になることであろう。

（3）変貌した景観

まず、2011年10月現在の登大路を撮影した写真8と入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：14）のそれとを比較していただきたい。写真集の解説によれば、「近鉄奈良駅か

ら土塀が続くこのあたりは、かつて興福寺子院が建ち並んでいたところで、奈良らしい木造の奈良地方裁判所、奈良県庁舎があった。その後、裁判所の建物（旧一条院宸殿）は唐招提寺へ移築、県庁舎は取り壊され、その隣に現在の県庁舎がたった（昭和40年）。土塀は道路の拡幅工事に伴い取り壊された」ことがわかる。

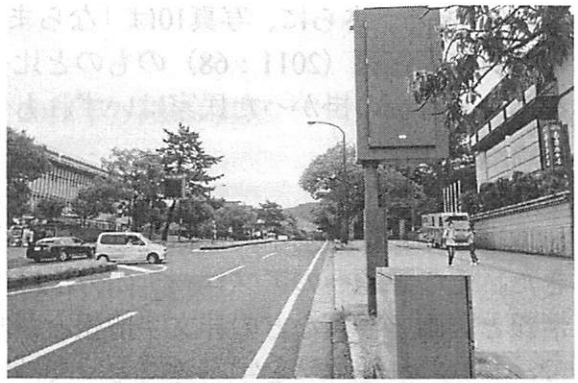

写真8　登大路

次に、「ならまち」と総称される地域の変貌を見ておきたい。「ならまち」は、710年に平城京へ都が遷されたとき、飛鳥の法興寺（飛鳥寺）が元興寺として平城京に移され、この地は「平城（奈良）の飛鳥」と呼ばれていた。現在、「飛鳥」という町名は残されていないが、「飛鳥小学校」などの呼称にその名を留めている。この元興寺の旧境内を中心とした地域を「ならまち」と呼んでいる。平城京の「外京」にあたり、当時の道筋をもとに発展した長い歴史を 持つ町である。平城京への遷都以来まちづくりがはじまり、南都と呼ばれる社寺のまちから商業のまちへ、商業のまちから観光のまちへと様々な時代背景の中で盛衰をくり返してきた町でもある。江戸時代 の末期から明治時代にかけての町家の面影を今に伝える「ならまち」は、訪れる人々にやすらぎとうるおいを与え、時には懐かしささえ感 じさせてくれる古い町並みである。鎌倉時代には、大寺院の保護のもとに北市・南市、室町時代には中市が開かれ商業が発達した。さらに社寺と結びついた手工業も発達し、郷に住む人たちの経済力、政治力が向上した。室町時代後半に下剋上の風潮がおこり支配層が混乱したため、郷に住む人たちはしだいに社寺の支配を離れて自治意識が高くなるとともに、町民として自立するようになった。このような動きは、江戸幕府の支配権が確立するまで続いた。安土桃山時代には、郡山城に入った豊臣秀長の支配下におかれた。秀長が郡山の繁栄をはかり、強大な興福寺の勢力を抑えるため、ならまちの商業に統制を加えた。そのため、ならまちは一時沈滞してしまうが江戸時代に入って奈良奉行が置かれると、晒（さらし）や酒などで産業の町として活気を取り戻した。 江戸時代中期以降は、墨以外の産業が衰え、東大寺や春日大社の門前町としてようやく命脈を保つ。明治になってからは、ならまちにも文明開化の波がおしよせ、牛肉店、洋髪の散髪屋、カステーラ屋などができた。そして1889（明治22）年には町制が、1898（明治31）年には市制が施行され現在に至っている（［v］より引用）。

写真9　伝香寺橋

写真10　ならまち（東城戸町）

入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：70）の「伝香寺橋」は、写真4と写真6に隣接する位置にある。「かつて小川町の伝香寺前にあった石橋とその通り。昭和35年頃から道路の拡幅工事が行われ、37年、今の『やすらぎの道』が完成し、町並みの風景が変わってしまった」のである。その2011年10月の様子が

写真9である。さらに、写真10は「ならまち」の東城戸町の一角である。入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011：68）のものと比べると、医院の建物や古道具、古着類の買い取りをしめす看板の掛かった民家はいずれも今は無く、駐車場に転用されていることがわかる。

まとめにかえて

地理学における基本的な命題は「環境と人間とのかかわり」にあるとわれわれは学んできた。その課題へのアプローチの方法は地理学においては、文献や統計を中心とした文字情報と図画・写真などの非文字情報とがある。そして、地図はその両者を兼ね備えるもので、われわれ地理学を学ぶ者にとっては不可欠のものであり、私自身もこれを使いこなすことの大切さを教え込まれてきた者の1人であるし、地図を使ったまち歩きは楽しみでもある。そのことを知りつつも今回敢えて地図のない地理学の小論をまとめたのは、地図に表現しきれない、超大縮尺の現実の観察に写真のもつ有効性を感じたからである。

そして、新旧の画像を比較することで、場所の移動だけでなく、時空間の移動を加味でき、そのことでツアーの楽しみが増すことにも一定の理解が得られたと思う。これまで見てきたように、時間的変化を視覚的に表現するための道具、すなわち記録としての優れた写真の影響力は極めて大きい。地理学は文字情報と非文字情報とを併せて利用する学問であり、その両者の楽しみ方も提起できる学問分野でもある。今回のわれわれの入江写真へのこだわりはそのことを示している。

本稿においては時空間の移動に際しての観察の観点を３点提起した。それは、写真をみるためのものでもある。（1）変わらぬ佇まい（2）追憶の空間（3）変貌した景観がそれである。この観点から奈良の街並みをみると、①寺社周辺に典型を見るように、古い佇まいとして受容され続けている場所に圧倒される一方で、②道路沿線に見られるように、そこと近接しつつ、その場所に暮らす人々とのかかわりの中で改変し続けているところ、そして③あるべき古都の姿へと変わっている状態とが密接不可分、三位一体の形で存在し、奈良の暮らしの景観を形成していることがわかる。このことは遺産に対する考え方、すなわち使い続けるための工夫を含めた文化景観保全の在り方を考える素材を示しているとも考えられるのではなかろうか。

引用・参照文献

秋山元秀（2003）イザベラ・バードとの〝ツイン・タイム・トラベル"の魅力. 東方 274：20-23.
石井實／井出策夫／北村嘉行（2005）『写真・工業地理学入門』原書房.
入江泰吉記念奈良市写真美術館編（2011）『入江泰吉の原風景/昭和の奈良大和路/昭和20～30年代』光村推古書院.
小松原尚（2012）「地理写真」と入江泰吉. 奈良地理学会報（復刊）34：8-14.
富田秋子（2010）展評'10④（ツイン・タイム・トラベル/イザベラ・バードの旅の世界）. アサヒカメラ 1001：214-215.
三木理史（2007）『世界を見せた明治の写真帳』【層双書・地球発見10】ナカニシヤ出版.

※秋山元秀（2003）、富田秋子（2010）、および新聞記事は、金坂清則・國友勇冴編（2012）「新聞・雑誌に見る私の歩み」金坂清則・京都大学大学院人間・環境学研究科地域空間論分野（非売品）. 所収のものを参照した。

引用・参照Web

［ｉ］入江泰吉記念奈良市写真美術館HP：http://www1.kcn.ne.jp/~naracmp/

2012年7月29日閲覧。

［ii］（社）奈良市観光協会公式HP「新薬師寺」：
http://narashikanko.or.jp/spot/index.php?m=d&id=59　2012年7月26日閲覧。

［iii］大和路アーカイブ奈良県観光情報HP「猿沢池」：
http://yamatoji.nara-kankou.or.jp/contents/　2012年7月26日閲覧。

［iv］（社）奈良市観光協会公式HP「興福寺」：
http://narashikanko.or.jp/heritage/koufukuji.html　2012年7月26日閲覧。

［v］（社）奈良市観光協会公式HP「ならまち」：
http://narashikanko.or.jp/naramachi/index.html　2012年7月26日閲覧。